

# 貝原益軒の養生論における音楽

光平有希

はじめに

人間が治療や健康促進、維持の手段として音楽を用いてきたことの歴史は古く、東西で古代まで遡ることができる。各時代を経て発展してきたそれらの歴史を辿り、その背景にある思想を解明することとは、現代音楽療法の思想形成の過程を辿る意味でも大きな意義を孕んでいるが、その歴史研究は、国内外でさかんになされてこなかった。

この音楽と治療や健康促進・維持との関係については、とかく西洋にのみ目が向けられる傾向にあるが、牧野英一郎によると日本でも古くから『梁塵秘抄口伝集卷十』に見られる今様の力<sup>1)</sup>、『ホオズキを吹くと咳が治る』といった習俗や各種の治療儀礼<sup>2)</sup>、「祇園祭

や春日若宮おんまつりのような芸能に見られる病氣治し<sup>3)</sup>、「誦経・祝詞・真言・イタコの経文といった仏教・神道・修験道・民俗宗教の病氣治し儀礼の音響」など、伝統芸能や儀礼の中で自国の文化的な土壌に根付いた音楽と治療との関連性に言及した記述は散見される。<sup>4)</sup>

その上で筆者が、このような伝統芸能や儀礼だけでなく、近代以前の伝統医学において書かれた音楽的記述の有無について調査してみたところ、医学書では記述がほとんどなかったものの、近世に刊行された養生書の中でいくつかの言及を見つけることができた。その中でも、今大路玄朔『延寿撮要』（一五九九年）、名古屋玄医『養生主論』（二六八三年）などでは音楽の逆効果に目が向けられていたのに対して、竹中通庵『古今養性録』（二六九二年）では、逆効果の可能性を提示しながらも他方では健康寄与の可能性をも示唆してお

り、この内容がその後の養生論における音楽の役割を考える上で萌芽となったと捉えることができる。そしてその後、養生論における音楽の適用については、貝原益軒『養生訓』（二七二年）の中で具体的に言及されるに至る。これを受け、本論では、益軒が養生の手段として音楽を用いた背景を探るとともに、具体的に彼の想定していた音楽とはいかなるものであり、またその音楽によってもたらされる影響とはどのようなものであったのかについて考察し、益軒の養生論における音楽の特徴を明らかにしてみたい。

したがって本論では、まず第一節で、主として『音楽紀聞』（二七〇二年）を用いて益軒における音楽思想の基盤を検討した後、第二節では、『頤生輯要』（一六八二年）及び『養生訓』を中心として益軒の養生観について検討する。続く第三節では、音楽思想と養生観という二つの土壌の上で論じられる、益軒の養生論での音楽の役割について『養生訓』のテキスト分析を通じて考察する。また、同時代に行われた他国での養生論における音楽の効果と比較することにより益軒の思想の特徴がさらに明らかになると考え、第四節では、同時代イギリスの養生概念である「非自然的物事」を基に論じられた音楽療法との比較を試みる。

## 一 貝原益軒における音楽思想の基盤

貝原益軒（一六三〇年～一七一四年）は黒田藩に仕えた儒者であり、特に教育思想家として多くの教訓書を残している。また儒医としても活躍するほか、音楽に対する造詣も深く、楽書である『音楽紀聞』の著作もあるように、楽理的知識も豊富であった。その益軒の音楽への関心については、三十五歳の頃より古楽の指導を受け始め、結婚後は、夫人の東軒（一六五二年～一七二三年）らと琵琶や胡琴などによる合奏を楽しんだようである。四十二歳の時より古楽への関心はさらに深まり、六十歳の賀宴を催した際には、益軒自ら琵琶を弾き、夫人が箏を奏したという。さらに、六十一歳から箏と箏を弾き始め、宮中の楽人である山井近江守（生没未詳）について古楽を深めたとされている。<sup>2)</sup>

以上は益軒の音楽における実践記録の情報であるが、では、彼の音楽思想とはいかなるものであったのであろうか。七十二歳の時に書かれた『音楽紀聞』を参考に検討したい。益軒は、自身の音楽的基盤について、次のように書いている。<sup>3)</sup>

凡音楽道をしらんと思はば、礼記の楽記を熟読すべし。又尚書論語の楽を説ける所と其本註と、及儀礼経伝通解曲礼全経等、

併、周程朱子の楽説を考へ見るべし。

益軒の思想は、古代中国儒教の礼楽思想の基盤である『礼記』の中の「楽記篇」（成立年不詳）や、『論語』（成立年不詳）などを中心とするものであり、ここから益軒の音楽思想の根底には、やはり儒教的な音楽観があることがわかる。では、益軒の考える礼楽思想とはどのようなものであるのだろうか。これに関して、益軒は『音楽紀聞』で次のように述べる。<sup>4</sup>

聖人礼楽を作りて、人に教へたまふは、本なき事を作り出したまふにあらず。凡礼は、天地の序なり。序とは、次第あるを云。陰陽の氣、時節にしたがひて次第あるは、天地の礼なり。樂は、天地の和なり。和とは、陰陽の氣、時にしたがひて和同するを云。これ天地の樂なり。聖人、天地の序と和とに本ずきて、礼樂を作り給ふ。

ここから人倫上の礼樂は、天地の秩序と調和の理に倣ったものであり、「天人合一の思想」、つまり天地の理が、人倫上の「礼」と「楽」になることを示したものである。<sup>5</sup>そこで天地の理について益軒は「楽記篇」を基盤に次のように説く。<sup>6</sup>

楽記曰く、天高く地下く万物散殊して、礼制行はる、是礼の本なり。流れて息まず、合同して化して樂興る、是れ樂の本なり。ひそかにおもふに、此数句は即是礼樂のよりて出る所、本源をとり。是天地の礼樂なり。至言と云ふべし。〔中略〕樂者天地の和也。礼は天地の序也。又曰く、大樂は天地の和を同じくし、大礼は天地と節を同じくす、是等はすべて礼樂の本をといけり。聖人天地に礼樂の道理あるを見、これにのつとりて礼樂を作りたまふ。天地自然の道理にもとずきたがへるなり。

このことから、天地自然の世界には、すべてのものが散在しているが、それらを秩序づけるのが「礼」、そしてそれらが流動してやまないものを調和するのが「楽」であることがわかる。要するにこの思想は天地自然の理を示したものであり、「礼」と「楽」の形而上の源泉を示したものである。その上で益軒は、現実において「礼」と「楽」とはいかなるものかについても次のように触れる。<sup>7</sup>

礼は、心の恭敬を本として、万事身の行の上に節文あるを云。樂とは、心の和樂を本として昔聖人の作りたまへる歌舞八音の音楽の文あるを云。

ここでは、「楽」を本と文として捉えている様子が窺える。では、

その相関性についてはどのように考えていたのであろうか。益軒は『音楽記聞』の冒頭で、次のように「楽記篇」を引用して言及する。<sup>8</sup>

楽記に樂者樂也。人情の免るること能はざる所也といへり。春の鶯、秋の蟬、凡もろもろの鳥さへずり、虫の声までも自然に吟声を発するは、是和氣より出る所、即樂也。

ここで益軒は、楽音のみならず、自然界の音までも「楽」と捉えており、音楽は楽しむものであり、楽しい心が自然に音楽となつて現われることが示唆されている。つまり、楽しい心（本）が音楽（文）となつて現われるのである。<sup>9</sup> このことから、内的な感情が音声となつて外に表現されるのであり、本と文との関係は表裏一体であることがわかる。そして、そのことについて益軒は次のようにも語る。<sup>10</sup>

本無ければ即立たず。文無ければ即行はれず。故礼樂は本と文とを兼て全備とす。

右のように益軒は記述し、両者の関係を平等の立場で説いているのであるが、その中心になるのは本であることを、次のように主張する。<sup>11</sup>

文有者は其末也。礼樂を以て身を修る者は恭敬和樂平行して相悖はいらざる也。文の如者は又其助也。

このように、本が中心であり、文は本を助ける存在として示されている。したがって、音楽は和樂に従い、支えることが重要な役割になるのである。これらのことから、音楽は天地自然の調和に共感する和樂の心の表現に専念することが求められるのである。では、それを満たす音楽とはいかなるものなのであろうか。それについて益軒が出している一つの答えは次のようになる。<sup>12</sup>

心の和をみちびくそなへり、後代の淫樂の心をとらかすは大に同じからず。

右のように、益軒は当時の一般の俗樂は拒否している。また、排除すべき俗樂について具体的に次のように述べる。<sup>13</sup>

小歌、淨瑠璃、三線の類、淫声をこのめば心をそこなふ。

このように、俗樂の中でも特に小歌・淨瑠璃・三味線の類は避けるべきであると述べている。では、益軒の推奨した音楽とは何なのであろうか。それは益軒が学び、その価値を認めていた古樂（雅樂）

であった。しかし一般の人々にとって当時、古楽は身近な存在ではなく、その代替案として益軒は次のような意見を述べている。<sup>14)</sup>

只、三百編以下の古詩を吟誦し、心思を和樂するのみ樂の本を得たるなるべし。万の事、本あり、文あり。樂を以ていはば、和樂の心は樂の本なり。歌舞は、音は、樂の文なり。只心を和樂にして古詩を熟誦し、時に吟詠せば、是樂の本をつとむと云べし。

右では、古楽にこだわらず、三百編以下の古詩、つまり儒学の教育内容に含まれている『詩経』（前十世紀頃～前八世紀頃）を吟詠して心を和樂にすればよいとする。同様の内容は『樂訓』（一七〇九年）の中で「いにしへの郢曲早歌の類声をかしく」、<sup>15)</sup>つまり民衆も日常的に用いることのできる朗詠の「郢曲」や、鎌倉時代から室町時代に流行した中世歌謡の一種である「早歌」を歌うことを勧める部分にも見られる。

ここまでは、益軒の音楽思想の基盤について考察してきたが、益軒の音楽思想は特に『礼記』『樂記篇』の影響を受けており、古代から伝わる伝統的な礼楽思想を重んじながらも、用いる音楽としては、当時の日本における民衆でも触れることのできるものをも考案する独自の姿勢が垣間見られるであろう。

さて、益軒が養生論の中で音楽について言及するにあたっては、音楽思想と並び、彼の持つ養生観もその基盤を形成している。では、益軒の養生観とはいかなるものであったのだろうか、次節で考察してみたい。

## 二 貝原益軒の養生観

まず、益軒が養生観について語っているのが『養生訓』であるが、その『養生訓』の冒頭で、益軒は養生について次のように論じる。<sup>16)</sup>

人の身は父母を本とし天地を初めとす。天地父母のめぐみをうけて生まれ、又養はれたるわが身なれば、わが私の物にあらず。天地のみたまもの、父母の残せる身なれば、つつしんでよく養ひて、そこなひやぶらず、天年を長くたもつべし。是天地父母につかへ奉る孝の本也。「中略」況大なる身命を、わが私の物として慎まず、飲食色慾を恣にし、元気をそこなひ病を求め、生付たる天年を短くして、早く身命を失ふ事、天地父母へ不孝のいたり、愚なる哉。人となりて此世に生きては、ひとへに父母天地に孝をつくし、人倫の道を行ひ、義理にしたがひて、なすべき程は寿福をうけ、久しく世にながらへて、喜び樂みをなさん事、誠に人の各願ふ處ならずや。如此ならむ事をねがはば、

先古の道をかうがへ、養生の術をまなんで、よくわが身をたもつべし。

ここでは、身体とは天地父母から受けたものであつて、その天地父母の生成の本意に従つて身体の養生を図ることは、儒教の求める「孝」の徳の実践にあたるとする。そして、天地父母の生成の本意に従つて生きること、つまり天地の真理を体得した聖人の教えを学び、それを実践することこそが、人として生きることの意義であるという益軒の認識が示されている。ここから益軒の養生観の根底には、儒学思想があるということがわかる。では、その実践とは具体的にどのようなものであろうか。同じく『養生訓』では次のように言及する。<sup>17</sup>

養生の術は、先わが身をそこなふ物を去べし。身をそこなふ物は、内慾と外邪となり。内慾とは飲食の慾、好色の慾、睡の慾、言語をほしいままにするの慾と、喜怒憂思悲恐驚の七情の慾を云。外邪とは天の四気なり。風寒暑湿を云。内慾をこらへて、すくなくし、外邪をおそれてふせぐ、是を以元気をそこなはず、病なくして天年を永くたもつべし。

ここで益軒は、飲食や好色、そして睡眠や言語に関する各慾と、

人間の感情のうち「喜・怒・憂・思・悲・恐・驚」といった七情を内慾に分類して、天候に関連する「風・寒・暑・湿」といった四気を外邪としている。そしてこれら内慾を制し、外邪を防ぐことで健康の根幹である「元氣」を保ち、これが養生に繋がるという考えを提示している。この中で、内慾に含まれる七情、及び外邪の四気とはいかなるもので、どこから派生したものであろうか。

まず、七情に関しては、益軒が音楽思想として影響を受けた「楽記篇」も含まれている『礼記』を検討したところ、『礼記』にも七情に言及している部分があつた。しかし『礼記』では、七情を「喜・怒・哀・懼・愛・惡・欲」に分類しており、益軒のいう「喜・怒・憂・思・悲・恐・驚」という七情とは「喜」「怒」以外は異なっている。益軒の七情の「喜・怒・憂・思・悲・恐・驚」の源泉は、益軒が医学の底本として熟読を勧めた前漢時代の『黄帝内経』（成立年不詳）などで言及がなされているほか、四気についても同じく『黄帝内経』などの中国医学古典にその拠り所が認められ、<sup>18</sup>益軒の考える養生の実践においては『礼記』のような儒教経典ではなく、中国医学古典からの影響が強いということがわかる。その背景には、益軒において、受容の度合いに関して儒教経典と中国医学古典との差はあまりなかったものの、儒医でもあつた益軒の中国医学古典に関する豊富な知識による選別から、養生の実践においては中国医学古典からの影響が強くなったとも考えられる。

さて、『養生訓』は、益軒が『養生訓』以前に刊行した『頤生輯要』という著作を底本としており、『頤生輯要』には多くの中国医学古典からの引照も見られる。<sup>19)</sup>したがって以下、『養生訓』と『頤生輯要』双方について検討してみたい。

『頤生輯要』は、益軒が五十三歳の頃から編纂されたものであるのに対し、『養生訓』は八十三歳の著作であり、両者の間には長期の時間的隔たりがある。また、『頤生輯要』は、益軒が古代中国の養生論を中心に、古今の養生論に関する漢籍の記事を原文のまま抄出編纂した資料集であるのに対し、『養生訓』は和文で書かれており、一般の知識層から広く庶民までをも対象にした啓蒙書という、異なつた性格を有する。

『頤生輯要』の冒頭に附された益軒の「養生論叙」や巻五末尾に附された弟子竹田定直（?〜一七四五年）の「後序」によると、生来、体質虚弱であつた益軒は、常々、読書の際に折に触れて数百条にのぼる養生関係の記事の抄録を書き抜いておいた。それを門人であつた竹田定直の手を借りて整理し、益軒が最終的に校閲を加えることにより『頤生輯要』は完成したという。<sup>20)</sup>ここで注目に値するのは、「楽」と養生との関連について言及する「楽志」という一篇を益軒が付け加えたことである。この点は、養生においても益軒が「楽」を重んじていたことを顕著に示しているであろう。

さて、『頤生輯要』は、その書物の性質からして益軒の養生に関

する考えを直接表明したのではないが、全体の構成は「総論」「養心気」「節飲食」「戒色欲付求論」「慎起居」「四時調撰」「導引調気」「用薬」「灸法」「養老」「慈幼」「楽志」といった十二篇からなる。引用された書物は、四書五経諸子をはじめとして専門の医書・養生書に至るまで広範囲にわたつており、引用部分の取捨選択には益軒の養生観が反映されていると考えられる。ではこの中で、どのような養生観が見られるのであろうか。

まず、中国における養生の伝統の中では、道教的養生術の要素が重要な部分を占めているのであるが、益軒は故意にこの部分を排除している。そしてこの理由について、『頤生輯要』の冒頭に附された「養生論叙」で益軒は、君子の養生とは、方外術士が肉体を錬成し気を盗んで、ただ長生を求め、欲望を逞しくしてその私的な存在としての人生の充足を求めるものとは異なるとした上で、中華の養生を説くものは、その多くが方外術士であり、それ故、養生の書には多く根拠のないでたらめの説が述べられるため熟考が必要との毅然とした態度を示す。<sup>21)</sup>益軒はこのような基本的認識に従い、『頤生輯要』には、道教的な影響も見られるものの、古代中国養生論で重んじられる、服気・服食・僻穀といった一般的な道術をはじめとして、鍊丹・胎息といったより道教的な養生術及び房中術の具体的技法はほとんど取り上げていない。それに対し同時代の中国では、明代の文人で朱子学に精通していた高濂（一五七三年〜一六二〇年）で

さえも、『遵生八牋』（十六〜十七世紀）の中心をなすのは「延年却病牋」であり、その主要部分は益軒が排除した気功に関するものである。つまり、『頤生輯要』で見せる道教的養生術に対する益軒の態度は、同時代の中国医学書とも異なっているといえるであろう。さらに、捕食に関して益軒は『頤生輯要』「四時調撰」で中国と日本との思想の違いを日本風土に合わないものは取捨選択し、すべて享受するものではないという姿勢を顯著に表している。<sup>22)</sup>

『頤生輯要』に見られるこのような記述は、益軒における古代中国養生論の受容の仕方を示していると考えられる。前述した竹中通庵『古今養性録』も益軒の『頤生輯要』と同じく古代から続く中国養生論を基に編纂されたものであるが、従来の中国の養生書の伝統を継承し、それに即して自著を構成した通庵の養生観と、「理に合わざる」ものを認めず、取捨選択しながら自流の養生観も示すという益軒の養生観の間には、古代中国養生論の受容の仕方において大きな相違がある。

一方、『養生訓』における養生観は、『頤生輯要』の養生観からどのように展開されているのであろうか。『養生訓』は、「総論上」「総論下」「飲食上」「飲食下」「飲酒」「飲茶附雜草」「慎色慾」「五官」「二便」「洗浴」「慎病」「択医」「用藥」「養老」「育幼」「鍼」「灸法」の十五篇からなる。この構成は、『頤生輯要』を踏まえてはいるものの、必ずしも同一ではない。それは、『頤生輯要』があくまでも

中国の養生論を集成、あるいは整理したものであるのに対して、『養生訓』は、日本人の実生活に即した項目立てが行われているからである。その結果、『頤生輯要』にあった「慎起居」「四時調撰」「導引調気」などの項目が削られ、「色慾」に関する記事が減らされて「求嗣」も削られる一方、飲食の部から、「飲酒」「飲茶」を独立させ、さらに煙草に関する記事を付録し、日常生活における衛生と密接な、「二便」「洗浴」「慎病」「鍼」などの項目が新たに立てられている。

また、益軒は『養生訓』の中で『黄帝内経』及び『神農本草経』（二世紀頃〜二世紀頃）、『千金方』（六五〇年頃）をはじめとする医学書を熟読することを勧めているが、その一方、諸書には偏説が多いため、多くの医学書を集め、広く異同を考案し、その長所をとり短所を捨てて医療を推進すべきとの苦言を呈している。<sup>23)</sup> この益軒の姿勢は江戸前期より隆盛を誇った古医方学派の姿勢とも相通じるものである。<sup>24)</sup>

さらに、益軒の養生観において欠くことのできない重要な概念が「元氣」である。<sup>25)</sup> 益軒は、『養生訓』が出版される前年の一七一四年に著した『自娛集』「陰陽論」の中で、「元氣」について『易経』（成立年不詳）を典拠として挙げ、「元氣」をもとにした氣一元論を著し、「元氣」を「万物」を生成し変易させるものとして定義している。<sup>26)</sup> そして、『養生訓』においては「人の身は元氣を天地にうけ



て生ずれ共〔中略〕生命は元氣の本也」と説き、やはりここでも生命を「元氣」と関連付けた。益軒は、宇宙から人倫に及ぶ広範囲を学問の対象とし、論理的思索を進めようとする朱子学を思想を認識しながらも、思考の基底にある実在と現象とを厳しく区別する二元論的な見方、すなわち理気二元論は踏襲せず、理気合一論、本質的には気一元論を唱えたのである。さらに益軒は、「元氣」について、次のような考えも示している。<sup>29)</sup>

人の元氣は、もとは天地の万物を生ずる氣なり。是人身の根本なり。人此氣にあらざれば生ぜず。

このように益軒は、万物を生ずる「氣」と人の「元氣」が同様のものであるとすることによつて、人も万物を生ずる「氣」から生成されるとしたのである。<sup>30)</sup> 益軒は、疾病の根柢も「氣」の異変に伴うものとし、養生のためには「元氣」の保持を目標とする元氣論を重視したが、この益軒が重視した元氣論に関しては中国古典医学から乖離した概念ではない。<sup>31)</sup> また、この「元氣」を支える様々な氣に「心氣」という氣があり、この「心氣」を音楽が養うことにより、養生の根源となる「元氣」にも働きかけるという理論を益軒は展開するが、これについては第三節で論じる。

さて、益軒は『養生訓』著述の抛り所を『頤生輯要』に仰いで

いるが、『頤生輯要』の文章を単に簡略に和文に直しただけではない。例えば、「総論下」には、孫思邈（五四一年頃～六八二年頃）の「十二少」に基づく次のような記述が見られる。<sup>32)</sup>

養生の要訣一あり。「中略」其要訣は少の一字なり。「中略」慾をすくなくすれば、身をやしなひ命をのぶ。慾をすくなくするの、その目録十二あり。「中略」食をすくし、飲ものをすくし、五味の偏をすくし、色慾をすくし、言語をすくし、事をすくし、怒をすくし、憂をすくし、悲をすくし、思をすくし、睡眠をすすべし。「中略」孫思邈が千金方にも、養生の十二少をいへり。其意同じ。目録は是と同じからず。右にいへる十二少は、今の時宜にかなへるなり。

右の記述では、養生にとつて避けるべきものが列挙されている。ここに益軒が挙げた「少」の項目は十一であり、これは『千金方』にいう「十二少」を意図的に修正したものである。そもそも『千金方』には、「少思、少念、少慾、少事、少語、少笑、少愁、少樂、少喜、少怒、少好、少悪」の「十二少」がある。<sup>33)</sup> そのうち、『頤生輯要』「総論」に引かれる『千金方』の「十二少」は、少思・少念・少慾・少事・少語・少笑・少愁・少樂・少喜・少怒・少好・少悪と同一であった。<sup>34)</sup> このうち、『養生訓』では少思・少慾・少事・少語・

少怒の五項目はそのまま援用している。しかし、益軒は飲食と睡眠を新たに追加し、愁を憂と悲に分割している。また、孫思邈の「少笑・少樂・少喜・少好・少悪の五項目も削除しているのである。これに関して、なぜ少好と少悪を削ったのかに関してにははっきりしないが、笑・樂・喜といった精神的な快樂の表出と関連した項目を削除しているのは注目に値する。特に「樂」を重んじる「樂志」は益軒が養生の重要な項目として、『頤生輯要』編纂に際して追加したものであり、益軒の人生観に基づく意図的な変更であったと思われる。また、益軒は古代中国の思想を受容しつつも、「樂」を避けるべきものとして捉えていた中国医学古典に対し、「樂」を養生に役立つものとして積極的に取り入れており、ここに相違点が見出される。

益軒にとつて「樂」は、非常に重要な役割を果たすものであり、『樂訓』『総論』に次のように記されている。<sup>35</sup>

この故に人はいとけなきより、いにしへのひじりの道をまなび、我が心にあめつちより生れ得たる仁を行ひてみづから樂しみ、人に仁をほどこして樂しましむべし。仁とは何ぞや、あはれみの心を本として、行ひ出せるもろの善をすべて仁と云。仁とは善の總名也。仁を行ふは是天地の御心にしたがへる也。是すなはちいにしへの聖人のをしへ給ふ人の道なり。此道にした

がひてみづから樂しみ、人を樂しましめて、人の道を行はんこそ、人と生まれたるかひ有て、顔之推が云けん空しく過すのうらみなかるべけれ。

このように、益軒は天地と人体との関連を論じ、正しい道を進みながら、楽しむことが非常に大切であると認識している。さらに、聖人の教えを自他ともに実践するという人としての務めを果たすことの中に「樂」は見出されると益軒は述べる。これに対応して、『養生訓』『総論上』には、人生の三樂として、「身に道を行ひ、ひが事なくして善を樂しむ」「身に病なくして、快く樂しむ」「命ながくして、久しく樂しむ」ことが挙げられる。<sup>36</sup>

これまで見てきたように、益軒の養生観は儒学的な養生観を呈しながらも、『養生訓』の中で益軒は、中国医学古典からの引照に終始せず、独自の理論を發展させた。そして、益軒の養生観では身体の養生と並び、精神の養生にも目が向けられ、それには「樂」を重視するという益軒の思想の特徴が顕著に見られた。この「樂」は、益軒の音楽思想でも重んじられており、養生論における音楽の役割について考える上でも大きな着目点になり得る。では、益軒は養生論において具体的にどのような音楽論を展開したのであろうか。

### 三 貝原益軒の養生論における音楽の役割

まず、益軒は人間に対する音楽の働きについていかなる思想を持っていたのか改めて見てみたい。この点に関し、『養生訓』より以前に書かれた教育書『和俗童子訓』（二七二〇年）では、次のように記している。<sup>(37)</sup>

小児の時より早く父母長兄につかへ、賓客に対して礼をつとめ、読書手習芸能をつとめまなびて、あしき方にうつるべきいとまなく、苦勞さすべし。はかなきあそびにひまをついやさしめて、ならはしあしくすべからず。

ここには、「礼」を中心として読書・手習・芸能をもつて行われる教育内容が構成されており、芸が教育の一角を占めていることが目に付く。また、芸について次のようにも益軒は言及している。<sup>(38)</sup>

芸はさまざま多し。其内にて人の日々に用るわざをえらびて学べし。無用の芸は、まなばずとも有なん。芸も亦道理ある事にて、学問の助となる。これをしらは、日用の事かけぬ芸を学ばざれば、たとへば木の本あれども枝葉なきが如し。

ここでは、日用に必要な芸だけ学ぶことを推奨するとともに、学問と並び芸も学ばなければならないとして、芸の必要性が説かれている。ここで益軒は芸の中から特に音楽を取り上げ、次のように述べる。<sup>(39)</sup>

又音楽をもすこぶるまなび、其心をやはらげ、楽しむべし。されど、もはらこのめば、心すさむ。幼少よりあそびたはふれの事に、心をうつさしむべからず。必制すべし。もろこしの音楽だにも、このみ過せば、心をとらかす。いはんや日本の俗に遊ぶ散樂は、其章歌いやしく、道理なくして、人のをしえとならざるをや。

右の記述では、まず「其心をやはらげ、楽しむべし」とし、音楽を学び行うことによつて心を和らげ、楽しむことができることを示唆している。この楽しむことは、これまで論じてきた「楽」であり、益軒にとつて生活上の重要な価値である。したがって楽しみをもたらす音楽は、見過ごすことのできない主要な実践であったのであろう。その一方で、ここでは音楽を過剰に嗜好することは望ましくなく、抑制することの必要性や、散樂による悪影響などについても言及している。さて、右の記述で益軒が書いている「其心をやはらげ」とは、苛立つていた気持ちを宥め和らげることであるが、この

音楽が気持ちをやめ和らげることに関しては『音楽紀聞』でも次のように語っている<sup>(40)</sup>。

楽なりて其心の和氣をやしなひ、心中の湮鬱をひらき。

ここでは、音楽は気持ちを和やかにするほか、心の陰鬱な状態を発散させる効果もあることを示している。このように、音楽が感情に働きかける効果について、益軒は『養生訓』の中で、「元氣」と関連付けて論じる。ではまず、その「元氣」と感情との関連について述べている以下の記述を見てみたい<sup>(41)</sup>。

素問に、怒れば氣上る。喜べば氣緩まる。悲めば氣消ゆ。恐るれば氣めぐらず。寒ければ氣とつ。暑ければ氣泄る。驚けば氣乱る。勞すれば氣へる。思へば氣結るといへり。百病は皆氣より生ず。病とは氣やむ也。故に養生の道は氣を調るにあり。調ふるは氣を和らぎ、平にする也。

ここで益軒は『黄帝内経 素問』を典拠として挙げ、気候と並び感情が「氣」に働きかけることに言及する。そして、身体を構成するものとして「氣」を重視し、病氣はすべて「氣」から生じ、養生は「氣」を整えることによつて成し遂げられると述べている。ここ

で述べられている「氣」というのは、正しくは「元氣」のことである。では、その「元氣」は養生においてどのように保てばよいのであろうか、これについて益軒は『養生訓』の中で次のように記している<sup>(42)</sup>。

生を養ふ道は、元氣を保つを本とす。元氣をたもつ道二あり。まづ元氣を害する物を去り、又元氣を養ふべし。元氣を害する物は内慾と外邪となり。すでに元氣を害するものをさらば、飲食動静に心を用て、元氣を養ふべし。

このように益軒は、養生の道は「元氣」を保つことが根本であるとし、「元氣」を保つ方法には、「元氣」を害する物を取り除くことと、「元氣」を養うことの二つがあるという。この「元氣」を養うことに関しては、「元氣」に影響をもたらす様々な「氣」について次のように論じる<sup>(43)</sup>。

養生の術は先心氣を養ふべし。心を和にし、氣を平らかにし、いかりと慾とをおさへ、うれひ思ひをすくなくし、心をくるしめず、氣をそこなはず、是心氣を養ふ要道なり。又臥す事をこのむべからず。久しく睡り臥せば、氣滞りてめぐらず。飲食いまだ消化せざるに、早く臥しねぶれば、食氣ふさがりて甚元氣

をそこなふ。「中略」又わかき時より色慾をつつしみ、精気を惜むべし。精気を多くつひやせば、下部の気よわくなり、元気の根本たへて必命短かし。もし飲食色慾の慎みなくば、日々補薬を服し、朝夕食補をなすとも、益なかるべし。又風寒暑湿の外邪をおそれふせぎ、起居動静を節にし、つつしみ、食後には歩行して身を動かし、時々導引して腰腹をなですり、手足をうごかし、労働して血気をめぐらし、飲食を消化せしむべし。一所に久しく安坐すべからず。是皆養生の要なり。養生の道は、病なき時つつしむにあり。

益軒はここで、養生を推進する、そして「元氣」を保つために「心氣」「食氣」<sup>(45)</sup>「精氣」<sup>(46)</sup>「血氣」<sup>(47)</sup>という諸々の気を養う必要があるということについて言及している。この中の「心氣」とは、古代中国から存在しており、心を内在させている気であり、この「心氣」の巡りや停滞、あるいはバランス失調により、感情の起伏の原因も求められる<sup>(48)</sup>。そして、心を和やかにし、怒りや欲、憂いや思い悩むことを減らし、心を苦しめないことが「心氣」を養い、それが「元氣」に繋がり、健康を維持する秘訣となり得るといふ。  
この養生における心あるいは「心氣」に関して益軒は、『頤生輯要』の「養心氣」篇において、『千金方』など中国医学古典の記述を基にしてその重要性を説いている<sup>(49)</sup>。また「心氣」の役割及び内容

については、『頤生輯要』と『養生訓』とで大きな差異はないため、益軒が『養生訓』で論じる「心氣」の重視についても、「元氣」と同様に、中国医学古典からの乖離は見られないといえる。そしてその心や「心氣」に関連付けて、益軒は音楽の持つ養生効果について言及する。まず次の記述に目を向けてみたい<sup>(50)</sup>。

古人は詠歌舞蹈して血脈を養ふ。詠歌はうたふ也。舞蹈は手のまひ足のふむ也。皆心を和らげ、身をうごかし、気をめぐらし、体をやしなふ、養生の道なり。

ここでは、詠歌舞蹈が養生に役立つことについて述べられており、詠歌は歌うこと、そして舞蹈は手足を用いて舞を踊ることをそれぞれ指していることがわかる。また、詠歌舞蹈は、心を和らげ、身体を動かして気の循環を促し、これが体を養い、血脈を養うことに繋がるといった養生への道筋が描かれている。益軒は、心を和らげるものとして、詠歌舞蹈のほかに「閑に日を送り、古書をよみ、古人の詩歌を吟じ、香をたぎ、古法帖を遊び、山水をのぞみ、月花をめで、草木を愛し、四時の好景を遊び、酒を微酔にのみ園菜を煮る」ことなどを勧めていることから、この詠歌舞蹈も比較的静かで穏やかなものであったということが想像に難くない。

しかしこの記述では、詠歌舞蹈が心身へと効果をもたらす過程や

方法については具体性に欠けている。したがって以下、詠歌舞蹈がもたらす効果について具体的に検討してみたい。まず、詠歌に関して益軒は『楽訓』で次のように論じる。<sup>52)</sup>

いにしへの郢曲早歌の類声をかしく氤氳としてつづしりうたふも、いささか心ゆくばかりなるは、湮鬱をひらきて気をやしなふ助と成ぬべし。古人は詠歌舞蹈をして其血脈をやしなへり。是心を樂しましめ、気をやしなふ術なるべし。

ここでいう「気」とは、その前に「湮鬱をひらきて」という湮鬱な心持ちをはらした上で養われるものであるために、「心気」を指していると考えられる。益軒は、まず詠歌の持つ心を和やかにさせ、「心気」を養う働きに注目していることがここから窺えるが、この心を和樂にさせることに関しては、詠歌のみに限ったことではなく、舞踏も含めた詠歌舞踏が心を樂しませ、その結果「心気」が養われることを示唆している。

そもそも、音楽が心に働きかけるといふ思想は、古代中国から存在しており、例えば『荀子』（前三世紀頃）では、嘆くような泣き声は悲しみを引き起こし、軍歌は心を奮い立たせ、『鄭衛』などの民間で流れる淫らな音楽は人を邪淫にさせ、舜帝の古楽《韶楽》や《武楽》の歌舞は荘重な気持ちにさせるといふ。また、益軒が自身

の音楽思想を形成する際に手本にした『礼記』『楽記篇』では、音楽により和樂がもたらされるほか、心が清らかになることにも言及されている。<sup>53)</sup> 益軒は、一貫して音楽が心を和やかにする、つまり和樂に通ずるものであるとして論じる。そしてその心の和樂は、「心気」を養うという考えに繋がっていくわけであるが、この音楽と「心気」とを関連付ける考えの背景には、前述したように主として『千金方』など中国医学古典からの影響があると考えられる。

また、益軒は礼樂思想を背景として古樂を見聞きする、つまり受動的な音楽活動も念頭に置く一方で、詠歌に関しては「歌うこと」、つまりここでは能動的に音楽活動を行うことに言及しているため、それは舞踏と並び、身体を動かすことにも繋がる。では、身体を動かすと何に影響を及ぼすのか、次の記述から考えてみたい。<sup>54)</sup>

およそ人の身、慾をすくなくし、時々身をうごかし、手足をはたらかし、歩行して久しく一所に安坐せざれば、血気めぐりて滞らず。養生の要務なり。

前記のように益軒は、身体を動かすことにより「血気」の循環を促進するとしている。さらに益軒は「血気」のほかにも、身体を動かすことで影響を受ける「気」が存在すると次のように論じる。<sup>55)</sup>

久しく安坐し、身をうごかさざれば〔中略〕食気とどこほりて、病おこる。

右記のように益軒は、動かなければ「食気」滞るとした上、食後の運動を勧めるに至る。このように詠歌舞蹈を含め、身体を動かすことは「血気」と「食気」に影響を与えると益軒は考えていた。この思想についても源流は古代中国にある。音楽が「血気」に影響を与えるというに関しては、次のように『礼記』『楽記篇』で述べられている。<sup>(56)</sup>

故に樂行われて倫清く、〔中略〕血氣和平なり。

しかし、ここでは「血気」のみに触れられており、「食気」に関しては言及されていない。この「食気」に関しては、その拠り所はやはり、益軒自身が後世の養生法はほとんどがこの両書を基礎としていると認めているように、『千金方』『千金翼方』などの中国医学古典にあり、<sup>(57)</sup>益軒の述べる音楽の養生効果に関しては、礼楽思想と中国医学古典から折衷した思想を基盤としているといえるであろう。このように、心身に働きかける詠歌舞蹈は、「元気」を構成する「心気」「血気」「食気」へと影響を与え、これら「気」の循環がよくなったことに伴い、血脈も養われ、「気血」が養われた身体は養

生へと繋がるという効果が見込まれると益軒は考える。

では、詠歌舞蹈の心身への影響は時系列的に行われるのか、あるいは並行的に行われるのであろうか。それに関し、益軒は心身の関連性を次のように述べる。<sup>(58)</sup>

養生の術、まづ心法をよくつつしみ守らざれば、行はれがたし。心を静にしてさわがしからず、いかりをおさへ慾をすくなくして、つねに楽しんでうれへず。是養生の術にて、心を守る道なり。心法を守らざれば、養生の術行はれず。故に心を養ひ身を養ふの工夫二なし。一術なり。

ここで益軒は、養生のためには、まず心を落ち着かせ、慾を少なくして、常に楽しんでいることが重要であるとともに、心を養うことと身体を養うことは区別なく、一つであるとする。さらに、益軒は心身の関係について以下のように論じる。<sup>(59)</sup>

心は人身の主君也。故天君という。思ふ事をつかさどる。耳目口鼻形形は頭身手足也此五は、きくと、見ると、かぐと、物いひ、物くふと、うごくこと、各其事をつかさどる職分ある故に、五官と云。心のつかひ物なり。心は内にありて五官をつかさどる。よく思ひて、五官の是非を正すべし。天君を以て五官をつかふ

は明なり。五官を以て天君をつかふは迷なり。心は身の主なれば、安樂ならしめて苦しむべからず。五官は天君の命をうけ、各官職をよくつとめて、恣なるべからず。

右で益軒は、心を身体の主君とし、安樂にすべきものであるとともに、心は「思うこと」を司る主であるとも述べている。さらに耳・目・口・鼻・形(体)という五官は、聞くこと、見ること、食べること、嗅ぐこと、動くことというそれぞれの役割としての職分があり、これは心の従者であるとする。つまり、益軒は心身一つの有機体として扱う一方、その中でまず心の健康を重視し、その後、に身体の健康ももたらされるとするのである。これに関し、益軒は次のようにも述べる。<sup>(6)</sup>

樂なりて其心和氣をやしなひ、心中の湮鬱をひらきかたし。故に古人は小兒の時より音楽をおしえ詠歌舞蹈して其性情を和らげ、その血脈をやしなふ。

すなわち、音楽は心を和やかにするのがその本性であり、音楽は心を解放する。そのため古人は子どもの時から音楽の教育を施し詠歌舞蹈で人間の性情を和らげ、それは結果的に血脈を養うことに繋がるという。<sup>(6)</sup> ここには益軒の養生における音楽効果論の役割構造が

見られる。

つまり、益軒は詠歌舞蹈に関しては、まず心を和樂にして「心氣」を養い、それとともに身体の「血氣」や「食氣」も養われるとする。そしてそれらが整ったのち血脈も養われていくといった時系列的な見解を示していることがわかる。さらに、益軒は養生の基本について次のように述べる。<sup>(6)</sup>

心は楽しむべし、苦しむべからず。身は勞すべし、やすめ過すべからず。凡わが身を愛し過すべからず。

つまり、養生のためには心を楽しませることと体を動かすことが必要であり、その両方の要素を音楽、その中でも詠歌舞蹈が持ち合わせているために、益軒が養生論の中で着目するに至ったのである。このように益軒が養生論において音楽に着目した記述を残していることは興味深い。また、これら益軒の養生論における音楽の役割についての思想的な基盤には、礼樂思想及び古代医学など、中国古典からの影響があるということが明らかとなった。



#### 四 貝原益軒の養生論における音楽の効果と同時代イギリスの

「非自然的事物」における音楽の効果との比較検討

さて、十七世紀から十八世紀の養生論における音楽の役割について、同時代の他国の動向についても調査してみたが、中国医学書においては管見の限りあまり論じられていないようである。しかし、同時代の西洋における医学・養生に関連する文献を調査した結果、イギリスにおいて養生論を用いながら体系的に論じられた音楽療法書が複数特定できた。したがって、本節では益軒の養生論における音楽に対する考え方の特徴をより明確なものにするために、イギリスの音楽療法思想を益軒の音楽効果論と比較してみたい。

同時代イギリスにも養生法的な概念が存在するが、それが *non-natural things* (以下、「非自然的事物」と訳す) である。この「非自然的事物」と絡め音楽を健康維持・促進や精神疾患の治療に役立てることを主張したのが牧師のロバート・バートン (一五七七年～一六四〇年)、医者のリチャード・ミード (一六七三年～一七五四年)、薬剤師のリチャード・ブラウン (十八世紀) である。

この「非自然的事物」とは、健康を左右する「食物」「鬱滞と排出」「空気」「運動」「目覚めと睡眠」「精神の動揺」といった六つの要素で、これは病気の原因や治療になるものとして、伝統医学の下

で伝承されてきた概念である。「非自然的事物」の用語の初出については不詳であるが、実質的な六つの中身はすでに古代ギリシアのヒポクラテス (前六世紀) やガレノス (二～三世紀) の著作に見られる。<sup>65)</sup> それらの概念は十六世紀あたりから、近代医学が発達するに従ってこれまでの伝統医学に対する懸念が次第に生じるにつれ、徐々に下火となっていく。しかし、そのような風潮の中でも十七世紀から十八世紀にかけて、臨床医学とともに伝統医学を重んじたトマス・シデナム (一六二四年～一六八九年) のほか、ジョージ・チェイン (一六七一年～一七四三年)、ミード、ジョン・フレンド (一六七五年～一七二八年) といったピトケアン学派の医者は、ニュートン哲学から影響を受けた機械論を重視する一方で、「非自然的事物」などを含む伝統医学にも目を向けた。<sup>66)</sup> この古代に典拠を求めることに関しては、益軒が中国古典を参照した姿勢と似ているであろう。また、「非自然的事物」とは、全く健康でもなく、正しく病気でもないとといった、私たちが通常そのような状態にある中間地帯において、予防的・防止的に介入するものであり、この点も益軒の養生観と釣り合っているといえる。

さて、イギリスでは、まずバートンの『メランコリーの解剖』<sup>67)</sup> で養生概念における音楽の効果について論じられる。バートンの音楽の効果に対する考えは精神的側面が強く、「非自然的事物」の中の「精神の動揺」に関連付けて音楽聴取に言及し、受動的な音楽の効

果の価値について検討をしている。<sup>(68)</sup>次いでミードは『毒物の機械的有効性論』<sup>(69)</sup>で、バートンと同じく精神的側面への視座も見せるが、その上に機械論の要素を色濃く反映させ、「非自然的物事」のうちの「精神の動揺」として歌唱と器楽聴取を、「運動」として舞踊を振り分ける。しかしミードはそのメカニズムにまでは言及していない。さらに、ミードによつて明らかにされなかった音楽の効果に関するメカニズムについても詳細に論じるのがブラウンである。それ故、益軒の養生論における音楽の効果と、このブラウンによつて一七二九年に執筆された『医療音楽』で論じられる音楽の効果との内容を比較検討することは、益軒の考える養生論での音楽の効果の特徴を検証することにおいても有益であると考えられる。<sup>(70)</sup>

ブラウンは『医療音楽』の中で「機械論医学」に基づく身体観を重視し、ミードの分類方法を踏襲しながら、「精神の動揺」として歌唱と器楽聴取を、「運動」として舞踊を振り分けている。また、『医療音楽』は、全体を通じメラニコリーやヒステリーなどの精神疾患を取り上げて音楽の効果について言及する。この点は益軒が健康促進・維持を念頭に一般的養生論における音楽の効果について広く論じていることと異なり、対象者が限定され、狭い範囲での論証となつている。また、ブラウンは『医療音楽』において、ニュートン哲学を反映したピトケアン学派の機械論に影響を受けた医学思想を基盤とした論を展開しており、益軒の「氣」を重視する傾向とは

異なるという点もここに記しておきたい。<sup>(71)</sup>

では『医療音楽』にはどのような内容が記されているのであろうか。ブラウン『医療音楽』の第一章「歌唱」と第三章「舞踊」に焦点を当てて考察してみたい。まず第一章の冒頭でブラウンは、歌唱は聴覚を刺激して快楽や歓喜を促進し、精神を鼓舞する故に精神疾患の治療に有効であるほか、歌唱は精神面のみならず、身体面にも影響を与えるとして六つの命題の下で論を展開する。<sup>(72)</sup>

この命題の中でブラウンは、精神疾患の治療では「アニマル・スピリッツ」の流動が最も重視されるべきであるという立場をとつている。「アニマル・スピリッツ」とは、十七世紀の機械論において空気と深い関係のある物質であり、脳で生成された後、神経を通して全身に分配されるものである。そしてこの「アニマル・スピリッツ」は身体機能の根源となり、脳及び神経系機能も司るという。<sup>(73)</sup>

ブラウンによると、歌唱は快楽や歓喜を包含している故に精神に働きかけ、その結果、精神と共鳴があり、精神と身体媒体でもある「アニマル・スピリッツ」の分泌を促進する。<sup>(74)</sup>さらに、「アニマル・スピリッツ」と血液循環にも相互作用があり、「アニマル・スピリッツ」の流入が強くなればなるほど脈拍も強く速くなる。<sup>(75)</sup>ここまで見ると「アニマル・スピリッツ」とは、益軒の述べる「心気」と近い概念であり、ここからは益軒が、「楽」の要素が含まれている詠歌について、心を和楽にすることにより「心気」が養わ

れ、その結果、身体の根幹である「元氣」や血脉が養われるとした、彼の思想と相通する解釈が見出せる。しかし、益軒が「心氣」について、養われるとのみ言及したのに対し、ブラウンは歌唱が「アニマル・スピリッツ」を分泌・生成するといったさらに具体的な表現で機械論的にその組成についても論じており、この点には相互間での差異が見出せる。

また、ブラウンは、歌唱が及ぼすその他の影響について、歌唱により「アニマル・スピリッツ」の流入がもたらされると、胃の筋肉繊維の状態及び弾力性が回復し、それによって消化不良が解消されるとする。さらには、歌唱による横隔膜や腹筋の頻繁な動きが食物を血液へと変換するのに役立つという<sup>76</sup>。ここからは、歌唱という能動的な音楽活動が「アニマル・スピリッツ」を経由して、内臓器官である胃、そして血液循環にもたらす運動的效果について、機械論的に論じている様子が窺える。一方、歌唱は肺にも影響をもたらすという。これに関しては、「アニマル・スピリッツ」を経由するのではなく、歌唱することで吸気が大きくなることにより、肺で生成される肺静脈の流動が活発化し、血液循環が促進されるとして、ブラウンは、肺という内臓器官にもたらす歌唱の直接的な運動的效果の側面を強調している。

ブラウンは、精神が身体に影響を与え、また身体も精神に影響を与えると考えており<sup>78</sup>、その双方の健康に重きを置いていたため、精

神と身体の媒体となる「アニマル・スピリッツ」が精神疾患の治療には不可欠であった。そして歌唱の快楽や歓喜に目を向けることで精神への働きにも目を向けるものの、内臓器官やそれを構成する繊維や組織といった身体面への歌唱の直接的な効果についても言及し、その双方が整った時に健康が育まれると考えていた。この歌うという行為が心身の双方に効果をもたらすということ、そして心（精神）と身体とに相関性があるという点に関しては、ブラウンと益軒に共通点が見出せる。しかし、身体より心を重視するような益軒の思想はブラウンには見当たらず、ブラウンにとって心身は完全に別個のものである。また、益軒があくまでも「心氣」「血氣」「食氣」といった「元氣」を司る諸々の「氣」を詠歌が養い、それが血脉を養うと論じたのに対し、ブラウンは「アニマル・スピリッツ」といった気体や、血液などの液体の器である内臓器官への具体的な効果について機械論的に論じており、身体そのものへの眼差しが益軒よりも強いということがここから窺えるのではないだろうか。

一方、舞踊についてブラウンはどのように考えているのであろうか。ブラウンは舞踊に関して大きく二つの効果を主張する。一つ目は、舞踊による筋肉運動で血管中の血液が希薄になり、血液流動が促進される。この血液流動の促進に呼応し、「アニマル・スピリッツ」の流入も促進されて精神疾患の治療に繋がるということである。というのも一部の精神疾患は、「アニマル・スピリッツ」の欠如で

もたらされる粘液質の血液によつて引き起こされるため、舞踊によつて血液循環や「アニマル・スピリッツ」の流動促進がもたらされることで症状が改善されるからである。二つ目は、舞踊によつて腸が刺激されて動きが活発化し、横隔膜・腹筋・胃等の腹部が総体的に働くことで消化と乳糜生成が助けられ、血中の老廃物の蓄積増加も断ち切られることである。<sup>(80)</sup> 舞踊でもブラウンは「アニマル・スピリッツ」の促進を重視しているが、歌唱のように精神に働きかけ、その結果得られる「アニマル・スピリッツ」の流動促進を強調してはいない。ここでは、あくまでも筋肉や腹部へ、直接働きかけることによつて血液循環や「アニマル・スピリッツ」の流動を促進する舞踊の效果に言及しており、舞踊の持つ運動的効果の側面を重視している点が特徴的である。これに関し、益軒の考える舞踊の效果と比較してみると、益軒も舞踏の運動的効果に焦点を当て、身体中の「血気」と「食気」に働きかけると血脈が養われると述べており、この点は大きな目で見ると双方ともに近い思想である。しかし、益軒は舞踏の運動的効果のみを強調したのではない。益軒にとつての舞踏は踊ることであつたが、動くだけの身体行為ではなく、詠歌が伴われることも併せて鑑み、心に和楽をもたらし、「心気」を養う効果も持ち合わせていた。この背景としては、ブラウンが舞踊という身体を動かすことによつてもたらされる腹部の相対的な運動的効果に着目し、それが血液循環や「アニマル・スピリッツ」を

促すことで精神疾患の治療が行われるとする、身体の個別化した動きに焦点を当てている。その一方で、益軒は、養生において重視すべきことは楽しむ、つまり「楽」の要素があることであり、その「楽」を享受するために詠歌舞踏という双方の複合を重視し、総合的な心及び身体への影響を念頭に置いて音楽の效果に言及しているという二者の大きな違いが影響している。

では、ブラウンは『医療音楽』第二章で言及した音楽を聴く、つまり器楽聴取に関してはどのような考えを示しているのだろうか。ブラウンはまず、外耳・内耳ともに音の伝わり方は空気振動の度合いに左右され、その空気振動の大きさによつて聴神経には様々な影響がもたらされるほか、この聴神経へと働く空気心地よい振動から直接、精神的な心地よさも生じると述べている。<sup>(81)</sup> その一方でブラウンは、音楽を聴取することで精神が高揚・鎮静することからわかるように、器楽聴取には直接的に精神に作用するという効果が認められ、これら双方の理由から器楽聴取は精神疾患の治療に有用であるとする。<sup>(82)</sup> ここからはブラウンが機械論的な身体のメカニズムに集中した論を展開している様子が浮き彫りとなっているが、このメカニズムに関して益軒は興味を示していない。

そしてさらにブラウンは、この器楽聴取によつてもたらされた心地よさが、歌唱の時と同じく「アニマル・スピリッツ」を促進するとともに、空気振動に影響を受けた聴神経も「アニマル・スピリッツ

「ツ」に働きかけるとして器楽音楽の内容、特に奏法や速度に関する具体例を挙げながら説明する。<sup>(85)</sup> 例えば、ヴァイオリンのストリングが素早く、大胆に打ち鳴らされるような奏法やアレグロの器楽曲の場合、空気振動は速く、短く、大胆になる。それによつて聴神経は活発に煽動され、共鳴した「アニマル・スピリッツ」も活性化される。さらに、この「アニマル・スピリッツ」が身体全体にこの共鳴と類似した感覚を伝達することにより、精神には活発で強い喜びが与えられるとブラウンは述べる。<sup>(86)</sup> これらのことからブラウンは、アレグロの曲は暗く悲観的な思想を抱いてしまいがちな、「憂うつ症」や「塞ぎ込み」の治療に役立つという。<sup>(87)</sup> 一方、ヴァイオリンの柔らかく遅いストロークが用いられるような奏法やアダージョの曲は、穏やかな空気振動が聴神経に働きかけ、それにより「アニマル・スピリッツ」は減退、あるいは逆流し、その結果、精神は非常に鎮静化し恍惚状態が引き起こされるといふ。<sup>(88)</sup> そして、怒りや激憤に満ちている時は激しく不規則な「アニマル・スピリッツ」の動きが付随しているため、それを防ぐには、まず柔らかなアダージョを用いるべきであるとブラウンは付け加える。<sup>(89)</sup> ブラウンの考えていた精神と器楽聴取の関係は、元々の精神状態とは逆の性質を有する楽曲を用いるという、いわば「逆療法的な概念」に似ている。<sup>(90)</sup> また、ブラウンは前述したようなアダージョとアレグロという反対の性質を有する楽曲を日常的に聴取することにより、音楽の心地よい対比で健康

を維持することができると考えていた。<sup>(91)</sup> このようにブラウンは、音楽は精神的な心地よさももたらすほか、感情の高揚及び鎮静化にも音楽が効果を持つとしており、受動的な音楽活動に対し多義的な効果を示している。さらに、ブラウンは音楽を組織する楽器の奏法やテンポに着目したさらに具体的な考えを展開するほか、器楽聴取がまず働きかけるのは神経と述べており、ここでも身体組織に目が向けられている。それに対し益軒は養生論の中で音楽の効果について論じる際には能動的な詠歌舞踏を推奨しているが、音楽を見聞きすること、つまり受動的な音楽活動が人間に働きかける感情傾向などにまで拮げて考察するならば、益軒は一貫して和樂をもたらずということに重きを置いており、彼らの受動的な音楽の効果に関しては大きな違いが認められる。

以上のことをまとめるならば、同時代のイギリス及び日本で、同様に養生論と絡めて音楽を用いることが提唱されているものの、ブラウンが音楽の効果を器官及び組織の働きに結び付け、身体重視の思想を論じるのに対し、益軒の論じる「血気」の思想は概念的な域を超えてはおらず、心身双方に音楽が効果を持つことを認めながらも、まず心に働きかける音楽の効果を重視する姿勢を顕著に見せていることに大きな違いが見られるであろう。この違いには、当時の西洋医学で先端の思想であった機械論を重視し、心身二元論のもとで治療としての音楽の効果を追究したブラウンと、中国古典から来

る氣一元論を基盤とし、教訓としての養生の一環として音楽の効果に目を向けた益軒の思想的立場も大きく影響していると考えられる。

おわりに

以上、『養生訓』『音楽紀聞』『頤生輯要』を中心とした益軒の著作の分析を通じて、益軒の養生論における音楽の適用の基盤には、『礼記』『楽記篇』を中心とした礼楽思想と、『千金方』や『黄帝内经』など中国医学古典に起源を持つ養生観があるということがわかった。そして、その基盤上で論じられた音楽の効果に関しては、古楽を見聞きする、つまり受動的な音楽活動を行うことによる感情傾向について益軒は充分認識しているものの、特に能動的に行う詠歌舞蹈に焦点を当て、詠歌舞蹈の持つ心身双方への働きかけが「氣血」を養い、それが養生に繋がるという考えを『養生訓』から読み解くことができると論じた。また、養生における音楽の役割、及び同時代の他国の動向についても検討したところ、中国医学書においては管見の限りあまり論じられていないようであったが、同時代のイギリスにおいて養生論における音楽の効果について言及されていた。そこで、益軒の思想と比較してみたところ、音楽の「楽」の要素を重視し、音楽が心に働きかける効果を特に重んじるという益軒の特徴が明らかとなった。

このように益軒の養生論における音楽の効果には、中国古典の思想を基盤としながらも、音楽の選択や養生観の取捨選択で見られたようにその引照に終始するのではなく、益軒の生きた近世日本の土壌に根付いた独自の観点から音楽の持つ心理的・生理的な効果を応用して、心身の健康維持・促進を図ることを目的として書かれているという点で、重要な示唆を含んでいるといえる。

注

- (1) 牧野英一郎「日本の音楽療法試論」『国立音楽大学音楽研究所年報』第十四集、二〇〇〇年、二一～三三頁。
- (2) 益軒と音楽との関係に関しては以下の文献を適宜参照した。益軒会編『益軒全集』第一巻、益軒全集刊行部、一九一一年、一～七一頁。井上忠『貝原益軒』吉川弘文館、一九八九年、五六～三三〇頁。
- (3) 『音楽紀聞』に関しては以下の国立国会図書館所蔵の写本を参照した。なお『音楽紀聞』に関しては、旧字体を新字体に改めて掲載する。貝原益軒『音楽紀聞』一七〇二年。
- (4) 貝原益軒『貝原益軒 室鳩巢』岩波書店、一九九〇年、一三六頁（日本思想体系 所収）。
- (5) これに関しては丸山（丸山眞男『日本政治思想史研究』東京大学出版会、一九五二年、二五頁）及び井上（井上正『貝原益軒の音楽教育思想』『帝京大学文学部教育学科紀要』第三十号、二〇〇五年、一三三～二四頁）を参照した。
- (6) 前掲『音楽紀聞』（国立国会図書館所蔵）。
- (7) 前掲『貝原益軒 室鳩巢』、一三六頁。

- (8) 貝原益軒『慎思録』(『益軒全集』第三卷) 図書刊行会、一九七三年、五三頁。なお、『慎思録』に関しては、筆者による書き下し文を掲載する。
- (9) 前掲「貝原益軒の音楽教育思想」、一三〇～二四頁。
- (10) 前掲『慎思録』、九八頁。
- (11) 同前、八九頁。
- (12) 前掲『貝原益軒 室鳩巢』、一三六頁。
- (13) 貝原益軒『和俗童子訓』(益軒会編『益軒全集』第三卷) 益軒全集刊行部、一九一一年、二二七頁。なお、『和俗童子訓』に関しては、旧字体を新字体に改めて掲載する。
- (14) 前掲『音楽紀聞』(国立国会図書館所蔵)。
- (15) 貝原益軒『楽訓』(益軒会編『益軒全集』第三卷) 益軒全集刊行部、一九一一年、六一七頁。なお、『楽訓』に関しては、旧字体を新字体に改めて掲載する。
- (16) 貝原益軒『養生訓』(益軒会編『益軒全集』第三卷) 益軒全集刊行部、一九一一年、四七六～四七七頁。なお、『養生訓』に関しては、旧字体を新字体に改めて掲載する。
- (17) 同前、四七七～四七八頁。
- (18) 『黄帝内経』によると、七情とは人間の精神情志活動のことであり、正常な状況では生理的な活動範囲にあるため、発病には至らない。ただし、突然激しい精神的な痛手を受けたり、長期にわたって続いたりすると、生理活動で調節できる範囲を超えてしまい、体内の陰陽、気血、臟腑の機能失調が引き起こされて病気になる。そして、この七情が病気の内因にあたる(『素問』「卒痛論」「陰陽応象大論」)。また、『黄帝内経』では一括して「喜・怒・憂・思・悲・恐・驚」について論じておらず、喜は『靈枢』「本神篇」、怒は『素問』「陰陽応象大論」と『靈枢』「本神篇」、憂は『靈枢』「本神篇」、思は『靈枢』「卒痛論」、悲は『素問』「宣明五氣論」「痿論」「卒痛論」と『靈枢』「本神篇」、恐は『素問』「調経論」「玉機真藏論」と『靈枢』「本神篇」「経

- 脈篇」、驚は『素問』「卒痛論」で主に論じられている。さらに、四気については『素問』「至真要大論」「五運行大論」「熱論」などで述べられる六気(六淫)をもととしており、松宮光伸によれば、益軒は、日本の風土を考慮し、より一般的な感覚に合わせて「風・寒・暑・湿」という四つを挙げているという(貝原益軒『養生訓』松宮光伸訳注、日本評論社、二〇〇八年、一三頁)。なお、『黄帝内経』については以下の訳本を適宜参照した。石田秀実他訳『黄帝内経素問』(上・中・下巻) 東洋学術出版社、一九九一年～一九九三年。石田秀実他訳『黄帝内経靈枢』(上・下巻) 東洋学術出版社、一九九九年～二〇〇〇年。
- (19) 『養生訓』「後記」には次の説明がある(貝原益軒『養生訓 全現代語訳』伊藤友信訳、講談社、二〇〇二年、四三〇頁)。  
右にしるせる所は、古人の言をやはらげ、古人の意をうけて、おしひろめし也。又先輩にきける所多し。みづから試み、しるしある事は、臆説といへどもしるし侍りぬ、是養生の大意なり。其条目の詳なる事は、説きつくしがたし。保養の道に志あらん人は、多く古人の書よんでしるべし。大意通じて、条目の詳なる事をしらざれば、其道を尽しがたし。愚生、昔わかくして書をよみし時、群書の内、養生の術を説ける古語をあつめて、門客にさづけ、其門類をわかつたしむ。名づけて頤生輯要と云。養生に志あらん人は、考がへ見給ふべし。ここにしるせしは、其要をとれる也。
- (20) しかし、実際の編纂の経緯はこれとは相違していたようであり、竹田定直が書き上げた『撰生精要』という書を、益軒が友人に回覧して好評を得ていたが、書名に「せ」の音が三つ連続して読みにくいという批判があったために、『頤生輯要』と改題した上、さらに自ら改訂を加えて、出版したと井上忠らは指摘している(前掲『貝原益軒』、一三二頁／『益軒資料』第四卷、九州史料刊行会、一九五七年、八八～九四頁)。また、藤谷邦夫は、定直宛ての書簡の中で益軒がかなり細かい指示助言を与え、かつ出版元の手配をしていることは事実であるが、本書の内容が竹田定直の『撰生精要』

をベースにしていることは、「養生論叙」では全く触れられていないという。その上で、ただ、「後序」の中で一箇所「前稿」に言及するというかたちで、『願生輯要』らしきものの存在が暗示されていると述べる。しかし、益軒には『慎思録』に長文の養生論が収められていることや、『玩古目録』に本書に採用された各種医方書の多くが載せられていることなどからも明らかのように、定直の『撰生精要』と益軒の抄録とは共通する点が多かつたのであり、すでに原稿が存在していた定直の『撰生精要』に手を加えるというかたちで編纂されたものと考えられることは可能であるとの見解を示している（麥谷邦夫「中国養生文化の伝統と益軒」横山俊夫編『貝原益軒——天地和楽の文明学』平凡社、一九九五年、二四二頁）。

(21) 貝原益軒『願生輯要』（益軒会編『益軒全集』第七卷）益軒全集刊行部、一九一一年、七五三頁。

(22) これに関しては、麥谷邦夫も同様の指摘をしている（前掲「中国養生文化の伝統と益軒」、二四五頁）。また、益軒は『養生訓』において「用薬」に関して論じる際、「薬剂一服大小の分量、中華の古法を考がへ、本邦の土宜にかなひて、過不及なかるべし」といい、日本の用量が中国に比べて少ないことに言及している。その理由として、日本人は生まれつき體質が虚弱で、肉などを食べないこと、日本は中国に比べて薬剂の産出が少ないこと、日本の医者は中国の医者に多く及ばないため、多量の薬剂を自信をもって処方できないことの三つを挙げている（前掲『養生訓』、五六八頁）。これは、時代・地理・風俗の相違を重視し、中国の学問を鵜呑みにしない益軒の態度が顕著に見られる部分であろう。さらに益軒は、医を学ぶ者の心得を説いて、「医を学ぶに、ふるき法をたつねて、ひろく学び、古方を多く考ふべし。又、今世の時運を考へ、人の強弱をはかり、日本の土宜と民族の風氣を知り、近古、わが国先輩の名医の治せし迹をも考へて、治療を行なふべし」と『養生訓』「択医」でも述べている（同前、五六〇頁）。

(23) 益軒は『黄帝内経』『神農本草経』『千金方』のほか、『難経』『金匱要略』

『甲乙経』『病原候論』『外台秘要』『衛生宝鑑』『三因方』『和剂局方証類』『本草除例』『丹溪 心法』『医経小学』『玉機微義』『医書大全』『袖珍方』『医方選要』『医案』『医林 集要』『医学綱目』『医学正伝』『医学入門』『名医類案』『名医方考』『医学原理』『鍼灸聚英』『医宗必読』『薬性解』『内経知要』などを読むことを勧める（同前、五六一頁）。

(24) 同前、五六二頁。

(25) 古医方学派は、香川修庵や後藤良山、山脇東洋らを輩出し、後世派と呼ばれる観念的な医学思想を唱えた李朱医学を排し、後漢の張仲景「傷寒論」を手本として実学的、あるいは実践的な医学体系を形作りうとした流派である。なお、益軒の養生観においては、古医方的な要素が見られるということに関しては、井上も指摘している（前掲『貝原益軒』、二九五頁）。

(26) これに関して井上は「本書『養生訓』を指す」を貫く思想は、人は天地の「元氣」を受けて、この気をもつて生の源、命の主とするのであるから、気の充足を計り、減退を防がなければならぬと説くので、大体中国の養生家の説に基づくとしている（前掲『貝原益軒』、二九六頁）。

(27) 貝原益軒『自娛集』（益軒会編『益軒全集』第二卷）益軒全集刊行部、一九一一年、一九一頁。

(28) 前掲『養生訓』、五〇八頁。

(29) 同前、四七九頁。

(30) これに関しては井上忠も「かれの説く『元氣』とは、『人身の根本』であり、『もとは天地の万物を生ずる気』から派生したもので、内外相応するものと見なす」としている（前掲『貝原益軒』、二九六頁）。

(31) これに関しては以下の文献を参照のこと。石田秀実『ころとからだ——中国古代における身体の思想』中国書店、一九九五年、一〇六〜二九七頁。なお、この「元氣」に関しては『黄帝内経』及び『論衡』『難経』などでも多く言及されている。

(32) 前掲『養生訓』、五〇三〜五〇四頁。



- (33) 孫思邈『備急千金要方』国立中国医薬研究所、一九九〇年、四七九頁。  
 なお、これに関しては福光も同様の指摘をしている（福光由布「『養生訓』に見られる『養生』と『楽』」広島藝術学会『藝術研究』第二十一・二十二号、二〇〇九年、一七九頁）。
- (34) 前掲『頤生輯要』、七二二頁。
- (35) 前掲『楽訓』、六〇五頁。
- (36) 前掲『養生訓』、四八五頁。
- (37) 前掲『和俗童子訓』、一七一頁。
- (38) 同前、一八三〜一八四頁。
- (39) 同前、一七八頁。
- (40) 前掲『音楽紀聞』（国立国会図書館所蔵）。
- (41) 前掲『養生訓』、五〇二〜五〇三頁。
- (42) 『黄帝内経』『素問』「挙痛論篇」に似た言葉が掲載されている（前掲『黄帝内経素問』、一一三〜一一四頁）。
- (43) 前掲『養生訓』、四八四頁。
- (44) 同前、四八〇頁。
- (45) 『黄帝内経』によると、「食気」とは、五穀・水穀中の精微なる気である。なお、「食気」に関しては、『黄帝内経』の『素問』「経脈別論篇」「陰陽応象大論篇」などで言及される。
- (46) 『黄帝内経』によると、「精気」とは、生命の基礎であり、人体を構成する根源の役割を果たし、人体の生長、発育、生殖、老衰と密接に関係する気である。なお、「精気」に関しては『黄帝内経』の『素問』「上古天真論」「五藏別論」「金匱真言論」「調経論」や『靈枢』「本神篇」「決気篇」「衛气篇」「五味篇」「大惑論」などで言及される。
- (47) 『黄帝内経』によると、血は気を源として脈中を流動するものであるが故に、気と血は不可分なものであるという。その中で「血気」は血液流動を促し肉体を構成する重要な役割を果たしている。なお、「血気」に関しては『黄帝内経』の『素問』「調経論」「八正神明論」「陰陽応象大論」「調経論」や『靈枢』「本蔵篇」「決気篇」「癰疽篇」「官衛生会篇」「経脈篇」「五音五味篇」「陰陽二十五人篇」「五味論」「癰疽篇眼」「風篇」「九鍼十二原篇」「官能篇」などで言及される。
- (48) 石田秀実『氣流れる身体』平河出版社、一九九三年、一〇〇〜一二二頁。前掲『こころからだ』、一〇四頁。
- (49) 前掲『頤生輯要』、七六九〜七七四頁。
- (50) 前掲『養生訓』、五〇四頁。
- (51) 同前、四九七頁。
- (52) 前掲『楽訓』、六一七頁。
- (53) 藤井専英『荀子 下』（新釈漢文大系六 所収）明治書院、一九六九年、六〇一〜六〇二頁。竹内照夫『礼記』（新釈漢文大系二十八 所収）明治書院、一九八七年、五八〇〜五八一頁。
- (54) 前掲『養生訓』、四九三頁。
- (55) 同前、四八五頁。
- (56) 前掲『礼記』、五七五頁。
- (57) 『益軒資料』第五巻、九州資料刊行会、一九五九年、三頁（竹田定直宛ての書簡）。
- (58) 前掲『養生訓』、五〇六頁。
- (59) 同前、五三六頁。
- (60) これに関し益軒は『養生訓』で次のようにも述べる（同前、四八一頁）。心は身の主也。しづかにして安からしむべし。身は心のやつこなり。うごかして勞せしむべし。心やすくしづかなれば、天君ゆたかに、くるしみなくして楽しむ。身うごきて勞すれば飲食滯らず、血気めぐりて病なし。
- (61) 前掲『音楽紀聞』（国立国会図書館所蔵）。
- (62) 益軒は、詠歌舞踏の運動効果に言及する際、古人が重んじた血脉を養うということに関しては、以下のようにも論じる（前掲『養生訓』、四八二頁）。

古の君子は、礼楽をこのんで行ひ、射・御を学び、力を勞働し、詠歌舞蹈して、血脈を養ひ、〔中略〕かくの如くつねに行なへば、鍼・灸・薬を用ずして病なし。

- (63) 同前、四九五頁。
- (64) 「非自然的事物」にしろては以下の文献を適宜参照した。L. J. Rather, "The Six Non-Naturals." in *Clio Medica* 3, 1968, pp. 337-347. Saul Jarcho, "Galen's Six Non-Naturals: A Bibliographic Note and Translation." in *Bulletin of the History of Medicine* 44, 1970, pp. 372-377. Luis Garcia-Ballster, *Galen and Galenism*, eds. Jon Arrizabalaga, Montserrat Cabré, Lulú Cifuentes, Fernando Salmon. Aldershot: Ashgate, 2002, pp. 105-115.
- (65) Hippocrates, *Epidemics* 2, 4-6. Edited and translated by Wesley D. Smith. Cambridge: Harvard University Press, 1994, pp. 286-287. Claudius Galenus, *Asmetica*. In *Opera omnia* vol. 1 (1821), ed. and trans. C. G. Kühn. Hildesheim: Georg Olms, 1997, pp. 367-368.
- (66) ブラウンの音楽療法思想の詳細については以下の論文を参照のこと。光平有希「医療音楽」にみるリチャード・ブラウンの音楽療法思想」総合研究大学院大学編『文化科学研究』二〇一三年、二五二〜二七二頁。
- (67) Robert Burton, *The Anatomy of Melancholy*. Oxford: John Lichfield, 1621.
- (68) ハートンの音楽療法の詳細については以下の論文を参照のこと。光平有希「R・ハートンの音楽療法に関する一考察——メランコリーの解剖」第二巻を中心に」日本音楽学会編『音楽学』第五十六巻一号、二〇一〇年、五二〜六五頁。
- (69) Richard Mead, *A Mechanical Account of Poisons in Several Essays*. London: RalphSmith, 1708, pp. 137, 142.
- (70) Richard Browne, *Medicina musica. Or, a Mechanical Essay on the Effects of Singing, Music, and Dancing, on Human Bodies. Revised and Corrected. To which is annex'd, a New Essay on the Nature and Care of the Spleen and Vapours*. London: John Cooke, 1729.
- (71) なお、『医療音楽』の構成は『献辞』と『序文』の後、第一章では『歌唱』、第二章では『音楽』、第三章では『舞踊』、第四章では『憂うつ症と塞き込みすなわちヒポコンドリーとヒステリーの状態』についてそれぞれ考察がなされている。
- (72) Browne, *op. cit.*, pp. 7-12. (命題一―六)
- (73) C. U. M. Smith, *The Animal Spirit Doctrine and the Origins of Neurophysiology*. Oxford: Oxford University Press, 2012, pp. 34-38.
- ガレノスの生理説は一六二八年に提唱されたウィリアム・ハーヴェー(一五七八年〜一六五七年)の血液循環論によつて血液循環が心臓の筋肉運動で説明できるようになったため、「ヴァイタル・スピリッツ」の説が覆されたほか、同じく十七世紀初頭にはヤン・ファン・ヘルモンツ(一五七九年〜一六四四年)が新陳代謝を各消化器官に基づいて七段階に分類し、胃の中における酸性胃液や十二指腸におけるアルカリ性の胆液を発見したことで新陳代謝の機能を説明できるようになり、「ナチュラル・スピリッツ」の概念が不要となった。しかしそうした中、依然として神経の働きはまだ解明されていなかったため、「アニマル・スピリッツ」の概念は十八世紀においても医学思想の中でなお利用され、ブラウンも精神疾患の治療においては「アニマル・スピリッツ」の流動を促進することが最も重要であると述べている。

(74) Browne, *op. cit.*, pp. 7-8, 20.

(75) *Ibid.*, p. 9.

(76) *Ibid.*, pp. 9-10, 20-21.

(77) *Ibid.*, pp. 10-11.

(78) *Ibid.*, p. 8.

(79) *Ibid.*, pp. 55-56.

(80) *Ibid.*, pp. 61-62.

- (18) *Ibid.*, pp. 32–33, 35.
- (28) *Ibid.*, pp. 31–32.
- (33) *Ibid.*, pp. 35–51.
- (34) *Ibid.*, pp. 35–36, 40, 42.
- (35) *Ibid.*, pp. 46–47.
- (36) *Ibid.*, p. 36.
- (37) *Ibid.*, p. 41.
- (38) Ewan Raud. *Metz-Musiktherapie*. Stuttgart: Gustav Fischer Verlag, 1992, p. 22.
- (39) Browne. *op. cit.*, p. 44.

謝辞

本論文執筆にあたっては、多くの方々にご協力・ご支援をいただいた。その中でも特に総合研究大学院大学のフレデリック・クレインス先生には懇篤なご指導を賜り、心よりお礼申しあげたい。そして、同大学において、儒教思想に關しては伊東貴之先生、音楽史に關しては細川周平先生からも多くのご教授をいただいた。さらに、国際日本文化研究センター図書館、北里大学医学図書館の方々には史料の収集において多大なるご協力をいただいた。多くの励ましと助力を与えてくださった皆様方に、この場を借りて深く感謝の意を表したい。